

標準アラビア語における一致の非対称

小林 亜希子
島根大学

要旨

標準アラビア語では、主語－動詞の一致が語順に影響される。本稿は、極小理論の枠組みでこの一致の非対称を説明する。近年 Chomsky が論じている Agree の操作には理論的問題があることを指摘し、Relativized Agree (RA) を提案する。RA を採用すると、SV 文、VS 文において Agree に関わるのは、それぞれ主語の最上位の「ラベル」、最上位の「主要部」となる。前者には浸透した ϕ 素性が蓄積されるため、動詞は主語と完全一致する。一方、後者が担う ϕ 素性は断片的な場合がある。標準アラビア語の場合、 ϕ 素性を担う最上位の主要部は N であるが、それは性の素性しか持たない。ゆえに、VS 文において、動詞は主語の性とのみ部分一致する。

1 イントロダクション

標準アラビア語 (Standard Arabic (SA)) の主語－動詞 (S-V) の一致パターンは、語順により異なることがある。

A. SV-VS 非対称: (1a, b) のように、S が普通名詞句である場合に見られる。SV 語順の時、V は S の性・数と一致する(完全一致)が、VS 語順の時、V は S の性とのみ一致する(部分一致)。(1b) の V は単数形だが、これは数の一致がない時のデフォルト形である。また、3 人称は実際には「非人称 (non-person)」であり、V の 3 人称屈折形は人称の値が指定されない時のデフォルト形であるとする (cf. Benveniste 1966, Harbert and Bahloul 2002)。

- (1) a. ?al-bint-āni qadim-atā.^1 b. qadim-at al-bint-āni.
the-girl-Nom.D came-3FD came-3FS the-girl-Nom.D
'The two girls came.'
(Harbert and Bahloul 2002: 45)

B. 普通名詞－代名詞非対称: S が代名詞であれば、語順にかかわらず S-V は完全一致する。(2a, b) と (3a, b) の対比から分かるように、VS 文でも代名詞主語は完全一致を引き起こす。

- (2) a. hum qara?-ū d-dars-a. b. qara?-ū hum-u d-dars-a.
they read-3MP the-lesson-Acc read-3MP they the-lesson-Acc
'They read the lesson.'
- (3) a. ?al-?awlād-u qara?-ū d-dars-a. b. qara?-a l-?awlād-u d-dars-a.
the-boys-Nom read-3MP the-lesson-Acc read-3MS the-boys-Nom the-lesson-Acc

‘The boys read the lesson.’

(Soltan 2006: 248, 240)

C. WCA-FCA 非対称: (4a, b) のように, S が等位接続された名詞句である時に観察される。SV 文の V は, S の両等位項の性・数を足した値を持つ (Whole Conjunct Agreement (WCA))。一方, VS 文の V は, 第一等位項の性とのみ一致する (First Conjunct Agreement (FCA))。

(4) a. [ʔal-bint-u wa ʔal-walad-u] k̄araj-ā.²

the-girl-Nom and the-boy-Nom left-3MD

‘The girl and the boy left.’

(Harbert and Bahloul 2002: 50)

b. qaraʔ-at [l-banāt-u wa l-ʔawlād-u] kitāb-an.

read-3FS the-girls-Nom and the-boys-Nom book-Acc

‘The girls and the boys read a book.’

(Mohammad 2000: 113)

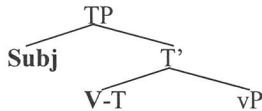
本稿の目的は, これらの非対称を極小理論の枠組みで原理的・統一的に説明することである。

2 先行研究

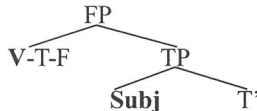
上記の非対称を説明しようとする試みは多くあるが, いずれも理論的・経験的問題から免れていない。ここでは, 2 つの分析を紹介する。その他については, Harbert and Bahloul (2002), Aoun et al. (2010) によるレビューを参照されたい。

最初に, Aoun et al. (1994) による一致消失分析を検討する。SV 文の構造を (5a) に示す。正確には, V-v が T に繰り上がるのだが, 「V」と略記する。S-V は SPEC-Head の関係のもと, 完全一致する。VS 文の構造は (5b) のとおりである。この分析によると, V は T に繰り上がった時点で (5a) のように S と性・数で一致するが, さらに上位に繰り上がることで, 数の一致を失う。ゆえに, VS 文の V は S の性とだけ一致する³。

(5) a. SV 文: 完全一致



b. VS 文: 部分一致



しかし, Harbert and Bahloul (2002) が批判するとおり, 移動した V がなぜ数の一致を失うのか, 或いは, なぜ性の一致を失わないのかについての十分な説明がなく, 一致消失はアドホックな想定にとどまっている。

経験的な問題もある。(4b) を例に考えてみよう。まず, V は T に繰り上がった時点で S (の両等位項) と完全一致し, 「男性・複数」の値を得る。しかし, V はさらに繰り上がることで数の値を失い, 「男性・単数」形になる, というのがこの分析の予測である。しかし, V は実際には「女性・単数」形となる。このように, FCA を予測できないこともこの分析の問題点である。

次に, Bahloul and Harbert (1993) 及び Harbert and Bahloul (2002) による統率・一致分析を検討する。SV 文の一致は (5a) と同じであるが, VS 文の分析が異なり, S が vP 内にとどまるとしている。その場合, SPEC-Head による一致は起こり得ないので, V は S を統率することで一致を起こす。ただ

し、この一致には次の条件が課される。

- (6) Only those features which originate on the Base of a Projection System are evaluated for agreement under government. (Bahloul and Harbert 1993: 22)

つまり、VはSの一番下にある主要部しか見ない。そして、Bahloul and Harbertによると、普通名詞句の最下位の主要部Nは、性の素性だけを担う。一方、代名詞は内部構造を持たず、全てのφ素性はDが担う。

以上をもとに、A, B, Cの非対称を説明する。SV文のSとVは、SPEC-Head一致により、常に完全一致する。VS文のVは、Sを統率することで一致を起こす。A, B, CのVS文における統率のターゲットを太字で示すと次のようになる。

- (7) a. V-T [DP D [NumP Num_[数] [NP N_[性]]]] [Sが普通名詞句]
b. V-T [DP **D**_[性・数・(人)]] [Sが代名詞]
c. V-T [CoP [DP1 D [NumP Num_[数] [NP N_[性]]]] [Co' Co [DP2 ...]]] [Sが等位接続句]

(7a)のVは、Nの性と一致する(部分一致)。(7b)のVは、Dをターゲットとして、完全一致を得る。(7c)のようにSが等位接続されているとき、第二等位項はVの統率領域にないので、第一等位項内のNだけが一致に関わる(FCA)。

統率・一致分析はこのように、A, B, Cの非対称を全て説明できるのだが、理論的な問題は残る。まず、極小理論では「統率」が利用できない。統率=Agreeと読み替えようとしても別の問題が起こる。(7a)のVが、より近いgoalであるNumを飛び越えてNとAgreeしていることになるが、極小理論はこのような非局所的操作を認めない。

SPEC-Headの一致に関しても問題がある。(7a)のDP構造が示すとおり、Dとその投射DPはφ素性を持っていない。このDPが(5a)のようにSPEC-Tを占めた時、DPとVはどうやって一致するのだろうか。Bahloul and Harbertによる説明はないが、次の可能性を考えてみよう。Num, Nの素性がラベルのDPに「浸透(percolate)」することにより、DPは[性・数]のφ素性を担うようになる⁴。従って、DP-VはSPEC-Headの関係の下、完全一致するのである。しかし、そうすると別の問題が生じてくる。(7a)において、VはDPに浸透した[性・数]を無視してより内部のgoalを目指すことになるからである。これも非局所的なAgreeであり、極小理論の精神に合わない。

3 提案

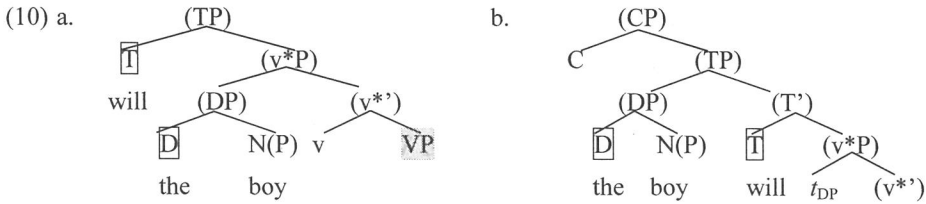
3.1 Relativized Agree

本稿が提案する分析の前提の一つとして、Relativized Agree (RA)を採用する。Kobayashi (2014)は、Chomskyが論じるAgreeには問題があることを指摘し、RAを提案した。本稿のRAはそれに修正を加えたものである。Chomskyが論じるAgreeとその問題を、例(8)を用いて示す。問題に関わるChomskyの議論を(9a-c)に引用する。

(8) The boy will buy the book.

(9) a. Feature checking, then, resolves to pairs of heads <H, H'>. (Chomsky 2004: 113)

- b. [T]hey (=uninterpretable features) must be valued at the phase level where they are transferred. (Chomsky 2007: 19)
- c. “[T]races” (technically, lower copies) are invisible. (Chomsky 2008: 150)



派生が (10a) まで進んだ時点で、T はその c-統御領域内にある D と、 ϕ 素性についてマッチする。Agree (= 解釈不可能素性の値づけ) は c-統御の関係にある主要部の間で起こる ((9a)) のだが、(10a) の時点で Agree (T, D) は起こらない。Agree は Transfer の時点まで待たねばならないからである ((9b))。しかし、(10b) のように CP フェイズが完成して Transfer が起こる時、主語 DP は SPEC-T に移動しており、T, D の c-統御関係は失われてしまっている。また、痕跡は Agree にとって不可視である ((9c)) ので、T が DP の痕跡(内の D)と Agree することもできない。このように、Chomsky の説明を文字どおりに解釈すると、主語が T よりも上に移動したら両者が Agree できなくなってしまう。

上の問題を解決するため、次の Agree を提案する。

(11) Relativized Agree (RA)

マッチする素性を持つ、initial head α , β がある時、

- 一方が他方を c-統御するならば、両者が Agree する。
- そうでない場合は、 α を支配し α の素性を持つラベル γ が probe となり、c-統御領域にある β と Agree する (probe 拡張)。

initial head は、「ラベルでない主要部」の意である。RA を採用すると、(10b) での Agree は次のようになる。initial head D とそのラベル D (インフォーマルに DP と呼ばれるもの) は、同一である (Chomsky 2004: 108-9) ので、同じ素性を持つ。ゆえに、ラベル D が拡張 probe となり、その c-統御領域にある T と Agree するのである⁵。

ラベルを Agree に用いるのは、initial head 同士の Agree ができない場合に限られる。その理由は次のように説明できるだろう。ラベルは解釈のために必要であるので、Transfer 時のラベル付け操作により句に与えられる (Chomsky 2013)。ゆえに、統語にラベルが存在することは基本的にない。(10a, b) のラベルを括弧に入れているのはそのためである。しかし、(10b) の場合は、ラベル D を用いなければ主語と T の Agree ができない。このような場合に限り、ラベル付け操作が Transfer に先行して適用され、ラベルが統語の中に現れるのである。

3.2 標準アラビア語の(代)名詞句

次に、SA の代名詞、普通名詞句の構造を提案する。これらは、それぞれ Walkow (2010), Kremers (2003) の分析に基本的に従ったものである。

まず、代名詞の構造を提案するが、Déchaine and Wiltschko (2002) の分析がその前提となる。彼女たちは、世界の言語の代名詞は次の3タイプに分けられるとした。(12b, c) の「φ」は、代名詞のφ素性をエンコードする位置とされる。

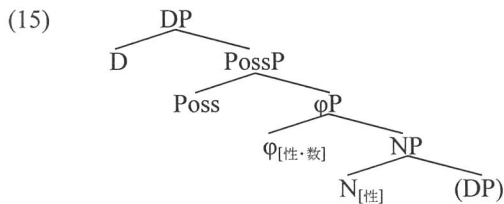
	構造	分布	束縛	例
(12) a.	NP タイプ: [NP N]	述語	---	日本語「彼」
b.	φP タイプ: [φP φ [NP N]]	述語・項	束縛変項になれる	米英語 3 人称
c.	DP タイプ: [DP D [φP φ [NP N]]]	項	R-表現	米英語 1, 2 人称

これを踏まえ、次の例を見てみよう。SA の代名詞は等式文の述語として ((13a, b)), また束縛変項として ((14)) 用いることができる。この観察から、Walkow (2010) はSAの代名詞はφPタイプであると主張する。本稿もその主張に従う。

- (13) a. *hādā huwa.* b. *?anti hiya.*
 this he you(FS) she
 ‘This is he.’ ‘You are she.’ (Walkow 2010, (15))

- (14) *?a-kāf-u ?ana wa [kull-u zamīl-in l-ī]₁ ?an*
 1S-fear I and [every-Nom colleague-Gen.Indef for-me]₁ C
?a-tanāfis-a ?ana wa huwa₁ °alā nafs-i l-wazāʔif-i.
 1S-compete-Subj I and he₁ for same-Gen the-jobs-Gen
 ‘I and every colleague of mine are afraid that I and he will be competing for the same job.’
 (Walkow 2010, (16))

次に、普通名詞句の構造を考える。Kremers (2003) は、語幹 N に接続する接尾辞の種類と順番に基づき、次のような構造を提案した。証拠となるデータを (16a-d) に挙げる。



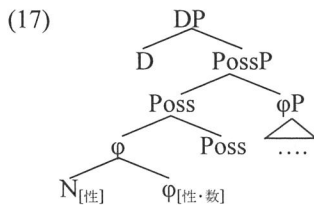
- (16) a. *?al-mu°allim-āt* c. *?al-mu°allim-ū-na*
 the-teacher-FP the-teacher-P.Nom-Unposs
 b. *mu°allim-āt-u-n* d. *mu°allim-ū l-madrasat-i*
 teacher-FP-Nom-Indef teacher-P.Nom the-school-Gen
 (Kremers 2003: 48, 51, 49)

Kremers では論じられていないが、本稿は Ritter (1992) や Bahloul and Harbert (1993), Walkow (2010) に従い、語幹 N が性素性を持つと考える。その N に最初に後続するのは、性・数を表す接尾辞である ((16a-d))。Kremers は性・数の素性を担う機能範疇を「Num(ber)」と名付けたが、本稿では、

(12) に倣い「 ϕ 」と呼ぶことにする。この接尾辞の後ろに、「N が DP 項を取らないこと (Unposs)」を示す形態素が現れることがある ((16c)) ので、その範疇 Poss が ϕ P とマージすると考える。定の接頭辞 *al-*、不定の接尾辞 *-n* は相補分布することから、同じ範疇 (D) だと考えられる。Poss の具現は ϕ P の素性に依存するが、D の具現形は常に同じである⁶。つまり、D と ϕ P との関係は Poss と ϕ P との関係よりも弱い。ゆえに、Poss よりも後に D がマージすると考える。

このように、語幹 N と接尾辞の結びつきの近さ・強さから (15) の構造を提案するのだが、(16a-d) で観察される語順となるためには、主要部の繰り上げが起こる必要がある。D が定の時は N が Poss にまで繰り上がって (16a, c) のような D-N- ϕ (-Unposs) の語順となる。一方、D が不定の時は N が D にまで繰り上がって (16b) のような N- ϕ -D の語順となる。

以上の分析が正しいとすると、DP の中で「 ϕ 素性を担う最上位の主要部 (highest head bearing ϕ -features, 以降 HH ϕ)」は N であることが帰結する。N が Poss にまで繰り上がった時の構造を (17) に、c-統御の定義を (18) に示す。



- (18) a. X c-commands Y iff X and Y are categories and X excludes Y and every category that dominates X dominates Y. (Kayne 1994: 18)
- b. α excludes β if no segment of α dominates β . (Chomsky 1986: 9)

ϕ 素性を持つ主要部は N と ϕ であるが、 ϕ は N を c-統御しない。そのセグメントの一つが N を排斥しないからである。逆に、N は ϕ を c-統御する。それを支配するカテゴリー (PossP, DP) が ϕ を支配するからである⁷。この N > ϕ 関係は、N が D にまで繰り上がっても変わらない。

また、素性浸透について確認しておく。主要部が持たない素性は非主要部から浸透できるのであれば (cf. 注 4), (17) において、ラベル DP は N や ϕ から浸透した素性すなわち [性・数] 素性を持つことになる。つまり、ラベル付け操作が起こる時、そのラベルには浸透素性も追加される、ということである。

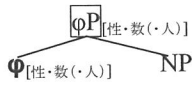
4 データ説明

以上の議論が正しければ、Relativized Agree により、S-V 間の Agree は次のように相対化される。HLb は、「最上位のラベル (highest label)」の意である。

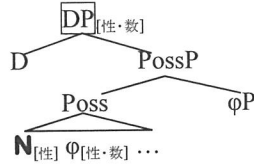
- (19)
- | | Probe | Goal |
|----------|---|---------------|
| a. SV 文: | 主語の HLb | V |
| b. VS 文: | V | 主語の HH ϕ |

また、SA の代名詞句、普通名詞句は次の構造を取る。HLb を囲み線で、HH ϕ を太字で示す。

(20) a. 代名詞句

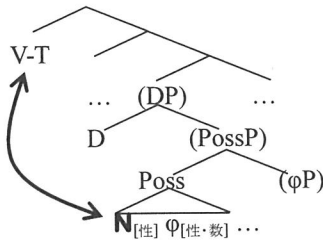


b. 普通名詞句

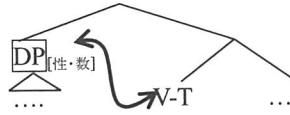


以上を踏まえて、A, B, C の非対称を説明する。まず、A の非対称を説明する。

(21) a. VS 文：部分一致



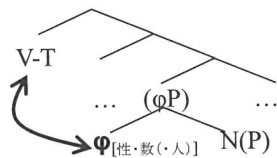
b. SV 文：完全一致



VS 文では、probe である V が c-統御領域を探索する。S の HHφ である N は性の素性しか持たないので、両者の Agree の結果、V には性の値のみが与えられる(部分一致)。一方、SV 文では、S の HLb である DP が probe となり、V と Agree する。ラベル DP は浸透した φ 素性を持つので、V には性・数の値が与えられる(完全一致)。

次に、B で示した非対称の不在を説明する。

(22) a. VS 文：完全一致



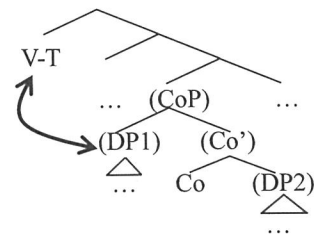
b. SV 文：完全一致



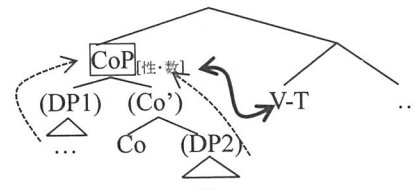
代名詞の HHφ である φ は、全ての φ 素性を担う。ゆえに、(22a) において、V は、φ から性・数(1, 2 人称の場合は人称も)の値をもらい、完全一致を示す。一方、(22b) では、φP が拡張 probe となって V と Agree する。φ と φP は同じ素性を持つため、V はやはり完全一致を示す。

最後に、C の非対称を説明する。

(23) a. VS 文：FCA



b. SV 文：WCA



- (26) a. allar þrjár [frægar greiningar] [á máli-nu]
 all three famous analyses of problem-the
 ‘all three famous analyses of the problem’
- b. allar [frægu greiningar]-nar þrjár [á máli-nu]
 all famous analyses-the three of problem-the
 ‘all the three famous analyses of the problem’ (Norris 2011: 102)

(26a, b) の対比から、A+N が定の D の前に移動することが分かる。Norris (2011) の分析に従って、定の D は φ P 移動を駆動すると考える。また、AP は SPEC- φ を占めるとする (cf. Kremers 2003)。

- (27) a. [DP \emptyset _[不定] [CardP three [φ P famous φ _[性・数] [NP analysis_[性]]]]] [of problem-the]]⁸
 b. [DP [φ P famous φ _[性・数] [NP analysis_[性]]]-the_[定] [CardP three t_{φ} P] [of problem-the]]

複数形屈折のため、N から φ への主要部繰り上げがあるかもしれない。その場合は $N > \varphi$ である。しかし、現在の議論にとって重要なのは、「DP の HH φ は D である」ということである。(27a) では D が唯一の HH φ であり、(27b) では、D, N 間に c-統御関係がないので、ともに HH φ である。

これを踏まえ、(24) でどのような Agree が起こるかを考える。probe V は HH φ の D, N の両方と Agree する⁹。D は数の素性を持つので、V には数の値が与えられる。ゆえに、アイスランド語の V は NomO と数の一致を示すのである。

6 結論

標準アラビア語の主語－動詞 (S-V) 一致は語順に影響される。本稿は、Relativized Agree (RA) の考えを用いてそのような一致の非対称が説明できることを示した。

RA に従えば、S の中のどの要素が Agree に関わるのかが、SV 文と VS 文で異なる。前者では、S の最上位のラベルが拡張された probe となり、goal の V と Agree する。ラベルには、S 内の φ 素性 (性・数・人称) が蓄積されるため、S-V は完全一致する。VS 文では、V が probe、S 内の φ を持つ最上位の主要部 (HH φ) が goal となり Agree する。標準アラビア語の場合、HH φ は N であり、それが性の素性のみを有するため、S-V は性についてのみ一致する。等位接続主語が VS 文に現れると、V が S の第一等位項の性とだけ一致することも同様に説明できる。一方、代名詞の HH φ は φ であり、これは全ての φ 素性を担うので、VS 文でも完全一致が見られる。

アイスランド語では、V が下位の DP と数の一致を起こせるが、この事実も説明できる。この言語では、D が DP の HH φ であり、数の素性を持っているからである。

注

*本稿は、関西言語学会第 39 回大会 (2014 年 6 月 15 日、大阪大学) での発表内容にもとづき、加筆・修正を行ったものである。質問・コメントを下された司会の田村幸誠先生およびフロアの方々、2 名の匿名査読者に感謝申し上げる。発表のアイデアをまとめるにあたっては、岩倉國浩先生、縄田裕幸先生、小原真子先生に貴重なご助言をいただいた。SA データのローマ字表記やハイフネーション、グロスの付け方は論文ごとに異なるが、本発表では表記を統一した。その際、藤井章吾先生

(大阪大学)に大変お世話になった。記して感謝したい。

なお、初期のアイデアに基づき書かれた未完成論文 “Relativized Agree and Agreement Asymmetries in Standard Arabic” を、筆者が管理するホームページに掲載している (http://www.ipc.shimane-u.ac.jp/eigogaku/pdf_kobayashi/publications/2013%20RA%20and%20SA.pdf, 2013年12月9日アップロード)。本稿の議論と重複する部分があることをお断りしておく。

¹ 本稿の例文の英語グロスに用いる略記は以下のとおりである。Acc=対格, D=双数, Dat=与格, F=女性, Gen=属格, Indef=不定, M=男性, N=中性, Nom=主格, P=複数, S=単数, Subj=仮定法。

² (4a) の等位項の順番を入れ替えてもVの屈折形は同じであることから, Vの「男性」は, 両等位項の性(男性・女性)を足した値であると考えられる。逆に, (4b) の等位項を入れ替えると, Vは「男性・単数」となるので, Vの性は第一等位項が決定することが分かる。

³ SAでは, 定形動詞だけでなく分詞などもSと完全一致しうることから, TでなくVが解釈不可能な ϕ 素性を持ち, SとのAgreeに関わると考える。

⁴ Lieber (1989), Cole et al. (1993) によると, 主要部Xが持たない素性は, 非主要部からXの投射に浸透することができる。

⁵ RAでは, probe, goalに実質的な違いはないと考える。Agreeに関わる上位の主要部・ラベルをprobe, 下位のそれをgoalと呼ぶにすぎない。

⁶ Unpossは, ϕ Pが男性・双数または男性・複数の時にしか顕在化しない。

⁷ 必要がない限り統語にラベルは現れないはずだから, より正確には「カテゴリー」でなく, (セット・マージにより作られる)「節点」による支配と言うべきであろう。

⁸ NのPP項は言語普遍的に[A+N]より外側の位置を占めるというAdger (2013)の観察にもとづき, PPを外置位置に作っている。

⁹ 「マッチング効果を最大化せよ」(Chomsky 2001: 15) という原理が働くため, Vが一方のHH ϕ とのみAgreeすることはない。

参考文献

- Adger, David (2013). *A Syntax of Substance*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Aoun, Joseph E., Elabbas Benmamoun and Lina Choueiri (2010). *The Syntax of Arabic*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Aoun, Joseph, Elabbas Benmamoun and Dominique Sportiche (1994). Agreement, word order, and conjunction in some varieties of Arabic. *Linguistic Inquiry*, 25, 195-220.
- Bahloul, Maher and Wayne Harbert (1993). Agreement asymmetries in Arabic. *WCCFL*, 11, 15-31.
- Benveniste, Émile (1966). *Problèmes de Linguistique Générale I*. Gallimard, Paris.
- Chomsky, Noam (1986). *Barriers*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (2001). Derivation by phase. In Kentowicz, M. (Ed.), *Ken Hale: A Life in Language*, pp. 1-52. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (2004). Beyond explanatory adequacy. In Belletti, A. (Ed.), *Structures and Beyond*:

- The Cartography of Syntactic Structures*, vol. 3, pp. 104-131. Oxford University Press, Oxford.
- Chomsky, Noam (2007). Approaching UG from below. In Sauerland, U. & Gärtner, H.-M. (Eds.), *Interfaces + Recursion = Language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, pp. 1-29. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Chomsky, Noam (2008). On phases. In Freidin, R. Otero, C. P. & Zubizarreta, M. L. (Eds.), *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, pp. 133-166. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (2013). Problems of projection. *Lingua*, 130, 33-49.
- Cole, Peter, Gabriella Hermon and Li-May Sung (1993). Feature percolation. *Journal of East Asian Linguistics*, 2, 91-118.
- Déchaïne, Rose-Marie and Martina Wiltschko (2002). Decomposing pronouns. *Linguistic Inquiry*, 33, 409-442.
- Harbert, Wayne and Maher Bahloul (2002). Postverbal subjects in Arabic and the theory of agreement. In Ouhalla, J. & Shlonsky, U. (Eds.), *Themes in Arabic and Hebrew Syntax*, pp. 45-70. Kluwer, Dordrecht.
- Holmberg, Anders and Thorbjörg Hróarsdóttir (2003). Agreement and movement in Icelandic raising constructions. *Lingua*, 113, 997-1019.
- Kayne, Richard S. (1994). *The Antisymmetry of Syntax*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Kobayashi, Akiko (2014). Subject as a probe. *JELS*, 31, 305-311.
- Kremers, Joost Merijn (2003). *The Arabic Noun Phrase: A Minimalist Approach*. Doctoral dissertation, University of Nijmegen.
- Lieber, Rochelle (1989). On percolation. *Yearbook of Morphology*, 2, 95-138.
- Mohammad, Mohammad A. (2000). *Word Order, Agreement and Pronominalization in Standard and Palestinian Arabic*. John Benjamins, Amsterdam.
- Munn, Alan (1999). First conjunct agreement: Against a clausal analysis. *Linguistic Inquiry*, 30, 643-668.
- Norris, Mark (2011). Extraposition and definiteness effects in Icelandic DPs. *Morphology at Santa Cruz: Papers in Honor of Jorge Hankamer*, pp. 97-121. University of California Santa Cruz.
- Ritter, Elizabeth (1992). Cross-linguistic evidence for Number Phrase. *Canadian Journal of Linguistics*, 37, 197-218.
- Soltan, Usama (2006). Standard Arabic subject-verb agreement asymmetry revisited in an Agree-based minimalist syntax. In Boeckx, C. (Ed.), *Agreement Systems*, pp. 239-265. John Benjamins, Amsterdam.
- Thráinsson, Höskuldur (2007). *The Syntax of Icelandic*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Walkow, Martin (2010). Locality of agreement in syntax and PF: Subject verb agreement asymmetries in Modern Standard Arabic. A handout presented at Sound, Structure, Meaning: Explorations at the Interface (GLS 2010), February 12-14.

Agreement Asymmetries in Standard Arabic

Akiko Kobayashi
Shimane University

Abstract

Standard Arabic exhibits asymmetries in subject-verb agreement. The aim of this paper is to provide a uniform account for these asymmetries in the minimalist framework. Pointing out a problem with Chomsky's Agree theory, I propose a Relativized Agree (RA) theory. Given the RA theory, different parts of the subject participate in Agree, depending on the structural relationship between the subject and the verb. In a SV sentence, the highest *label* of the subject works as a probe. In a VS sentence, on the other hand, the highest *head* bearing ϕ -features serve as a goal. In the former case, the verb shows full agreement with the subject since the full set of ϕ -features resides on the label. In the latter case, the verb agrees with the subject only in gender. On independent grounds I argue that the highest ϕ -bearing head in DP is N, which has only a gender feature. Consequently, the verb receives only a gender value from the N. Partial agreement in VS sentences is thus explained. First conjunct agreement, which is observed in VS sentences involving coordinated subjects, can be accounted for in the same way. On the other hand, pronominal subjects trigger full agreement either in SV or VS sentences. This is explained by the assumption that the highest ϕ -bearing head of a pronoun is ϕ , which bears a full set of ϕ -features. The proposed analysis can also deal with the absence of partial agreement in Icelandic V-DP sentences. Morphological evidence shows that the highest ϕ -bearing head in Icelandic DPs is D, which bears gender and number features. In V-DP configuration, therefore, the verb agrees with D and receives number as well as gender values from the D.